

山本伸一（編）

# 臨床 OT ROM 治療—運動・解剖学の基本的理解から介入ポイント・実技・症例への展開

中 村 春 基  
（日本作業療法士協会、会長）



まず、OT の手で、ROM 治療に正面から取り組まれた山本伸一氏とその仲間の日ごろからの取り組みに感謝したい。また、このような機会をいただき、読者の方に「想い」を伝えられることを大変嬉しく思う。本書によって OT の新たな気づきや施術の技術向上が図られ、一人でも多くの患者が満足し、笑顔で人生を歩み出す助けになれば、山本氏も幸せなことを思う。

さて、なぜ、このような書籍が発刊されたのか、そこから本書の意義を考えてみたい。作業療法白書、厚生労働省等の各種の調査結果から、医療、介護の作業療法で、関節可動域の改善を目標した徒手的な治療が行われていることが明らかになっている。また、多くの臨床場面を見学させていただく中でも、理学療法室と見間違ふほどの光景に愕然とすることも多い。一方では、作業療法は医学を基礎に治療を行うことを業とするわけであるから、関節機能障害を取り扱うときは、当然、その対象となる関節の知識は必須であるにもかかわらず、OT の多くは運動学や解剖学を苦手とする方が多い。つまり、OT が行う ROM 治療は、うがった見方をすれば、医学的な知識に乏しい施術であるのではな

いとおそらく、患者に「害」を与えてはいないかと、各 OT が自分の技術に向き合う必要を感じる。

では何をガイドに自分の技術を振り返るかを考えるとき、本書の意義は大きい。はじめに総論で山本らは、「近年、ROM テストでは『基本軸』『移動軸』をベースとしている。果たしてこの知識だけで ROM の改善が見込めるのか。当然ながら臨床では、それは難しい」と述べている。まったく同感である。徒手的な ROM 治療を行っている多くの OT はぜひ、読むべき書籍と思う。そして、本書をガイドに自分の行っている ROM 治療を見直してほしい。

さて、本書は、第 I 部 総論、第 II 部は上肢・体幹の構造と ROM 治療、第 III 部 下肢の構造と ROM 治療、第 IV 部 症例報告—疾患別 ROM 治療の実践の 4 部構成である。第 I 部では、タイトルの内容に加え、知覚—運動系としての関節運動、操作系としての関節運動、多関節連携システム、タッチ等、基礎知識の臨床活用等、意欲的な取り組みが記載されている。第 II～III 部は関節ごとに関節構造、多くの写真での実技の解説と症例での効果、臨床での注意点が簡潔、明瞭に記載されている。

たとえば、手関節の項目で、83 頁に「実技の別法 1」として、「1）

骨間膜の改善」がある。さて、これをお読みのあなた、なぜ骨間膜の改善？ それがわかったあなたは、解剖学と運動学の知識に基づく手関節の ROM 治療を行っていると思う。わからない方は、治療効果が上がらない理由を、「痛み」や、「拘縮」の「せい」にして、自分の知識、技術を批判的にみるという専門家としての行動がとれていない可能性が高い。ぜひ、本書で知識と効果のある技術を得る楽しさを体験してほしい。

第 IV 部では、骨折、脳血管障害、脊髄損傷、関節リウマチについて、実に臨床的、総合的な視点から、ROM 治療が述べられている。いずれも関節の治療を通して、ADL や IADL、生活に作業療法がいか

に寄与するかが述べられており、明日からの臨床の参考となることは確実である。

豊富な臨床経験に裏づけされた、OT によるはじめての ROM 治療を取り上げた意欲的な本である。臨床家、教育者、経験の多寡を問わず、多くの OT に読んでいただきたい良書である。

〔B5 判 256 頁 4,200 円 + 税〕  
三輪書店 刊  
☎ 03-6801-8357